

# 19

## 絞りテキスタイルの形状加工による立体表現について

Concerning the three-dimensional expression in Shibori textile by heat setting

ファッション造形学科・助手  
Department of Fashion Design・Research Associate

大須賀 彩 Aya OSUKA

ファッション造形学科・教授  
Department of Fashion Design・Professor

安藤 文子 Fumiko ANDO

## 1 研究の概要

### 1.1 要旨

人間は古来より装身具で身体を飾り、衣類にさまざまな染色を施してきた。それは当初、魔除けの意味があったと言われているが、次第に美しく装うことに楽しみを見出していった。

筆者らは、これまで染めをテーマに研究し技術を積み重ねてきた。研究過程で、伝統的染色の認知度が低迷しているということ、伝統工芸全体が抱えている後継者不足の問題が明らかになった。

そこで、最も世界へ発信し続けている絞り(縞縞)に的を絞り、これまでの伝統技術を取り入れながら立体表現をテーマに設定し種々の技法により、オリジナルテキスタイルを考案した。

現在研究の途中であるが、産地にて習得した絞りの技法を取り入れた新しい絞り表現を模索している。

## 2 絞り染めについて

### 2.1 日本における絞り染め

絞りの技術は、糸で布地を強く括ることにより、「粒」や「しわ」を作る防染という簡単な原理によるものである。昔から世界各地でも様々な絞り染めが行われていた。

日本における最古の絞り染めは、法隆寺や正倉院の染織物の宝物の中から見つけることができる。

奈良時代の文様を表す染色法には縞縞(絞り染め)の他に夾縞(きょうけち・板締め)の類)、蠟縞(ろうけち・ロウ染め)があり、全て中国からの伝播によるものとされているが、縞縞(絞り染め)は他の二つの染色法と異なり、簡単なものはそれ以前から日本に存在していたであろうと推察されている。

### 2.2 有松・鳴海絞り

昔ながらの古い民家が立ち並ぶ有松町は、伝統産業の技術と町の景観が密接に結びついた貴重な文化遺産である。

絞り染めは、名古屋市緑区の有松・鳴海地域を中心に生産され、江戸時代以降、日本国内における絞り製品の大半を生産しており、国の伝統工芸品にも指定されている。

### 2.3 絞りの種類

有松・鳴海絞りは400年の歴史を持ち、100種類以上の技法を生み出している。一つの技法によってもくる位置を変化させることによって種類が変わり「くくる」「縫う」「はさむ」の三つに代表される絞り職人は、習い覚えた一つの技術を最後まで追い求める

という人材育成が自然と行われ、各技術者が「一人一芸」技術を持って作業を行ってきた。

しかし現在では、かつて100種類を越えた技法も工芸士の減少と共に大きく数を減じているのが現状である。

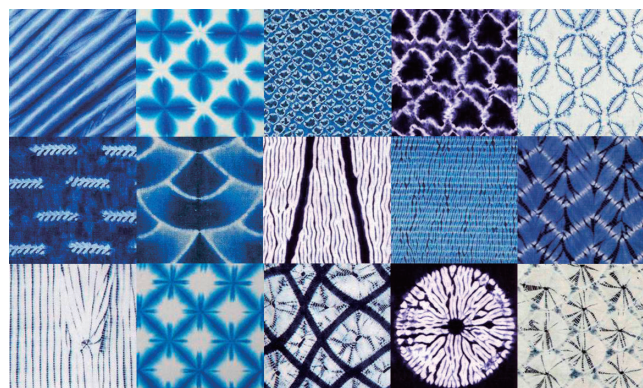


写真1: 絞りの代表的な種類

## 2.4 絞り道具

絞り技法の核となる「括り(くくり)」は、技法の種類によって加工方法も使う道具も異なる。

道具といっても、小さな台や糸を巻きつける棒、針など、実に簡単なものでしかなく、両手のみを働かせて非常に緻密で細やかさが要求される。

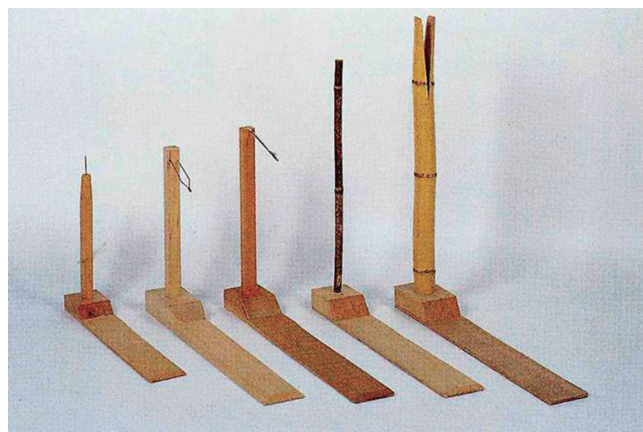


写真2: くくり台(突き出し鹿の子台・巻き上げ台・ひった鹿の子台・手蜘蛛台・手筋台)

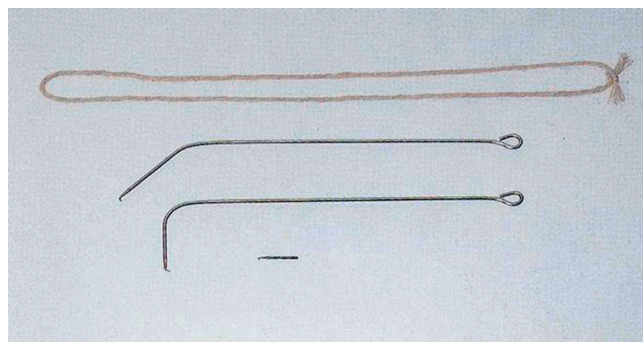


写真3: 絞り針(手筋絞りに使用する紐・手蜘蛛針・三浦針・鹿の子針)

## 2.5 現在でも世界へ発信し続けている絞り染め

勢いを失いつつあった有松鳴海絞りを再度普及の道に導いたのが名古屋市での「第一回国際絞り会議」の開催であった。

1992年11月に有松・鳴海絞の関係者が主催者となり、世界20カ国から絞りのデザイナーや研究者を呼んで、パネルディスカッションやファッションショー、ワークショップなどを開催した。絞りをテーマに世界の関係者が一堂に会するのは、これが初めての試みであった。

当時の参加者は850人にのぼり、うち海外からが150人、これに一般市民も加わり、結果的に10万人規模の盛大なイベントとなったのである。これによって、有松・鳴海絞を世界に広く知らしめる大きな成果を上げた。また、3年に及ぶ準備段階において世界各国の絞り関係者とシンポジウムに向けた話し合いを重ねる中で、「絞りの新しい方向性」を生み出す一つの大きなヒントを得たのである。

これらの成果として世界中に絞りのネットワークを結成し、海外から多くのアーティストやデザイナーが日本に研修に訪れ、国内をはじめ世界中に「SHIBORI」のネットワークが広がり、多くのデザイナーが絞りを取り上げている。

第8回国際絞り会議では、2011年12月に香港理工大学で開催された。絞りの発展と国際的絞り技法の交流を中心とした会議になり若い世代が活躍する場となった。

2014年10月では、中国で第9回の国際絞り会議が予定されている。

## 3 伝統技術と新たなテキスタイルの発信

### 3.1 新たな絞りテキスタイル表現

日本のファッションテキスタイルとして、絞りのイメージ発信することで、海外バイヤーに強力に印象付け、世界的に集客力を高める必要がある。

本研究を通して、伝統的技術を活かしながら様々なテキスタイルで試行錯誤した結果、表現方法として以下のようなものがある。

#### ①染色を行わない絞り形状の立体表現

- ・ポリエステル熱可塑性を活かし形状固定を行う
- ・ウールを使用し縮絨で形状固定する

#### ②現在の技術を併用し新たな付加価値を高める

- ・光触媒
- ・ステンレス加工生地

#### ③糸を外さず装飾的に残した絞りの形状表現

#### ④脱色による絞り表現

#### ⑤技術を組み合わせる

#### ⑥テキスタイルを使用した2次元表現

#### ・グラフィック表現、写真表現

#### ⑦インテリアへの応用



## 3.2 絞りの形状を美しく見せる工夫

### (1) ポリエステルを使った形状固定

染色を行わず絞りのみに特化した美しい形状表現に重点を置き作品を発表した。絞るという技法を使いながら新しい形状が作れないかと考えた。

絞りの多くは工程上、布を針で引っ掛けてつまみ、糸を下から上に巻き上げるため、とがった形状が多い。これまでの工程を見直し、円形の形状から丸く柔らかい印象を作り出すという発想から展開した。素材は、ポリエステルを使用し、熱可塑性を利用して形状固定をおこなった。



写真4: 大学院1年次の作品

### (2) ステンレス加工した生地の利用

その他にもさまざまな技術を組み合わせテクスタイルを制作した。



写真5: ステンレス生地を使ったテクスタイル・形状固定したポリエステル

ステンレス加工された生地に絞りを施し、薬品でステンレスをはがすことにより、染色時とは逆の効果を出した。絞りの形状だけで表現し、絞り染めのもつ世界観を最大限に表現した。

### (3) ウールを縮絨させる

ウール生地を使用し、縮絨させて生地の厚みを変化させた。

職人の多くは、80才を越える方が多く、ウールを絞るには綿よりも力を使う為、若い人が手がけることにより実現した絞りである。また、糸の締め方によって柄や形状が変化し、様々なテクスタイルを作り出すことができる。



写真6: ウールを縮絨させ形状固定したテクスタイル

### (4) 糸を装飾的に利用

染色する際に使用する絞り糸を金糸・銀糸、テグスで巻き上げ形状をそのまま活かし作品にした。

テクスタイル制作・熱加工を大須賀が担当、そしてパターン・縫製を中ノ瀬 千秋氏が制作し共同デザインでコンテストに挑戦した。秀作賞を受賞した作品が写真7である。



写真7: 糸を装飾的に残した作品



#### (5) 脱色させる

カシミアウール素材を使用し、黒に染めたものを脱色させ表現した。2010年のパリコレクションに使用され現在でもドイツで販売されている。



写真8: 脱色法を使った作品(2010年パリコレクションSUZUSAN)



写真9: 技法をかえた脱色テキスタイル

## 4 大学院2年次の作品

### 4.1 包みをテーマにした作品

大学院修了時の作品テーマに添って、立体感を持たせたテキスタイルに軽量感を追及した。レディースのデザイン要素をメンズスタイルに置き換え、絞り染めの持つ女性的なイメージから脱却させた。



写真10: 大学院2年次の「包み」をテーマにした作品1



写真11: 大学院2年次「包み」をテーマにした作品2



## 4.2 グラフィック表現

ファッションの分野だけではなく、制作したテキスタイルを使用してグラフィック表現をした。透け感のある生地に照明を当てることによって絞り染めの持っている世界感を表現することができた。

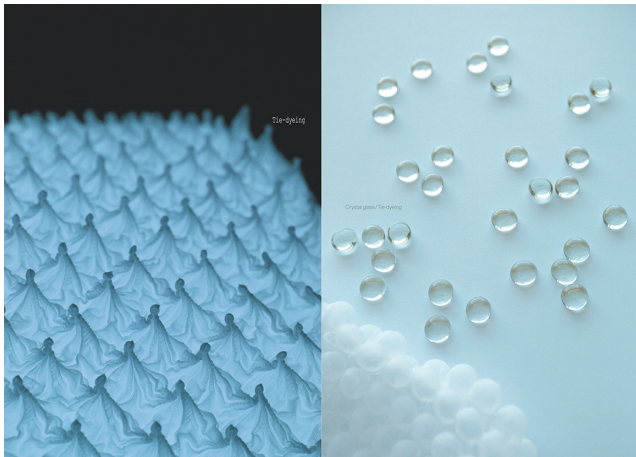


写真12:グラフィック表現1



写真13:グラフィック表現2  
(第22回 国際ポスタービエンナーレWarszawa2010入選)

## 4.3 写真表現

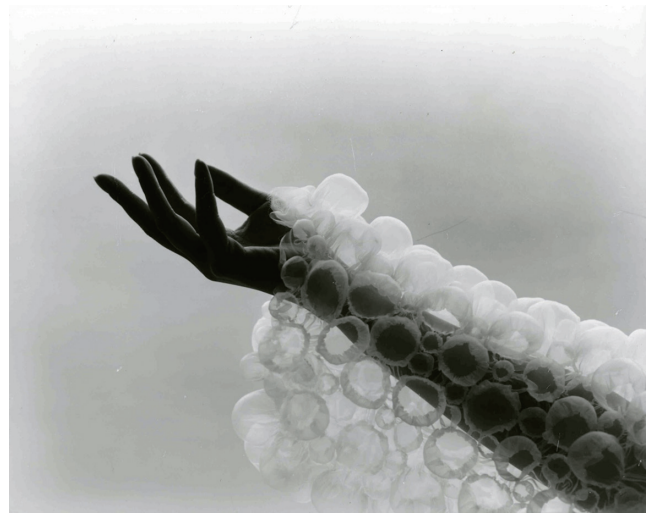


写真14:写真で表現した絞り染め(オリジナル絞り)

## 5 インテリアへの応用

### 5.1 ランプシェード

ランプシェードは、有松絞りに関わっていく中でその一部を担当している。これらの作品はヨーロッパを中心に展開され、オフィスやホテルなどに使用されている。染色することなく形状のみで表現したランプシェードは光の陰影で美しく表現されている。

熱加工がしてあるため水洗いをしても形状が残り、取り外しができることで高く評価されている。



写真15:絞りを使ったランプシェード(SUZUSAN写真提供)例1



写真16: 絞りを使ったランプシェード (SUZUSAN写真提供) 例2



写真17: ランプシェードに使用したテキスタイル(杓目絞り)



写真18: ランプシェードに使用したテキスタイル(三浦絞り)

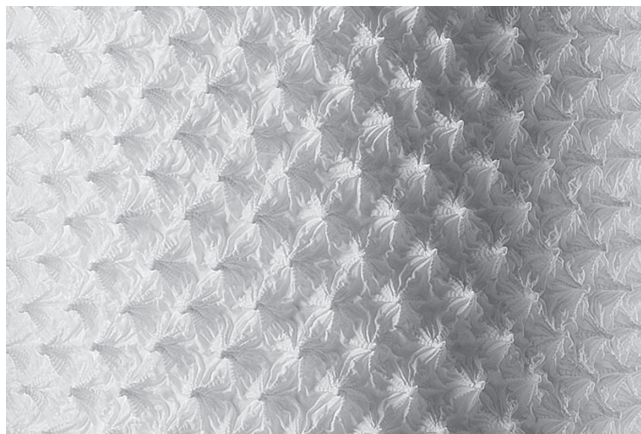


写真19: ランプシェードに使用したテキスタイル(機械蜘蛛絞り)

## 6 まとめ

### 6.1 絞り染めの可能性

日本のテキスタイルは、エコ・テキスタイルや機能素材、染色・加工など、品質、技術、感性への評価が高く、国際競争力を持つ分野といえる。絞りに限らず、これからのデザイナーに求められるものとして、テキスタイルそのものの知識や加工の知識を踏まえたオリジナリティーのあるデザインが必要となる。

これまでの伝統を取り入れ、細部へのこだわりと個々の特性を生かした、日本のファッションテキスタイルと絞りのイメージを、世界的に広く認知させることを目的として研究を行ってきた。

本研究により、歴史的に染色の技術としての絞りを、様々な素材の立体加工を行うことで、現在のライフスタイルに活用できる可能性を見出した。新しいテキスタイルの提案を世界に発信することにより、伝統的技術の認知度の低迷、伝統工芸全体が抱えている後継者不足の問題が解決していくと考える。

今後も日本独自の伝統と技術をさらに見直し、時代に合わせた新たな表現を試み、各産地の連携とマーケティングを再考しながら日本から世界に発信していきたい。

## 謝辞

本研究に対し、各場面でアドバイスをいただいたファッション造形学科の先生方に深謝致します。

また、絞りの技術を他の分野へ応用することについてご指導していただきましたデザイン学科・映像学科の先生方、絞り技術のご指導をいただいた「SUZUSAN」村瀬 裕氏、村瀬 弘行氏、絞りの加工にあたり(有)久野染工場と、手蜘蛛絞り職人の本間 とめこ氏、三浦絞り職人の北野 とよ氏をはじめ職人の皆様にご協力頂いたことを感謝申し上げます。

## 参考文献

- [1] 鳴海絞. 鳴海絞商工協同組合, 1979.
- [2] 染織の美 第10号、株式会社紫紅社(編)、1981.
- [3] 伝統産業論 その国際性の研究、有斐閣1985.
- [4] 日本の手わざ 有松・鳴海絞、株式会社源流社竹田嘉兵衛・野久保昌良2006
- [5] 写真8. 9. 15.16.17.18.19.写真提供「SUZUSAN」2010